
ドラマチック受精

土壇牙ゐバイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラマチック受精

【Z-コード】

Z5186P

【作者名】

土壇牙ゐバイ

【あらすじ】

地獄のような場所を走り続ける者達。彼らが目指しているのは・・・

第一部

R指定

(文中に性的な表現が含まれておりますので、注意下さい。)

ネボスケ
長老
若頭
鶴亀

・・・・はつ！

い、いじめだうつ・・・・？

・・・・あれ？

ぼ、僕は・・・・僕は誰なんだ？

そして・・・・僕はなぜ走っているのだろうつ・・・・？

うおおおお！熱い！・・・・身体が焼けるよひて熱い！

いつたいどうなっているんだ？！

長 「よひやへお皿覚めじやな、ネボスケ。」

隣で併走していた老人が話しかけてくる。

ネ 「あ、あなたは？」

長 「わしか？わしは、おぬしを導く者、いや
ネ 「導く・・・・・？僕をへどこへ？」

長 「ふつふつふ。」

ネ 「ハアハア、それより何なんですか、この熱れは？それに僕ら
はなぜ走っているんですか？！」

長 「お一つと、決して足を止めてはならんぞ。」

ネ 「ハアハア、そう言われましても、身体が溶けるようなこの熱
さ、とても走ってなんかいられませんよ。」

長 「まわりを見てみい。」

ネ 「え？」

長 「ほれ、実際に溶けている者もおるぢやね。」

周囲を見渡すと、そこには自分と同じ姿をした者たちが無数にうご
めいていた。ある者は「助けてー！」と泣き叫び、またある者は「
死にたくないー！」と命乞いをしていた。そして足を止めて休んだ
者は一瞬にして身体を業火に焼かれ、溶けていった。それはま
さに、混沌と阿鼻叫喚の地獄絵図であった。

ネ 「ハアハア、どうなつてるんだ・・・・！僕は地獄に来てしま
つたのか・・・・？！」

長 「地獄か。なるほど。確かに地獄と言えなくもない。ふつふつ

۱۵۸

「ハアハア、それにしてもおじいさん。あなたはこんな状況下なのに、随分余裕な顔をされてますね・・・。信じられない。」

「そうかの？まあ、まだ始まつたばかりだしのう。」

ネ
一
ハ
ア
ハ
ア
、
始
ま
つ
た
ば
か
り
？

「それとわしは、みながら『長老』と呼ばれてゐる。以後、お

ぬしもそり呼びなされ。」

「ハアハア、長老ですか。」

長 「みな、わしを年寄り扱いするでな。」

「ハアハア、あのつ、長老、一つ気になることがあるんです。」

長 「なんぞ?」

「ハアハア、他人のあなたにこんなことを聞くのはおかしな話

ですが、ハアハア、僕は、誰なんですか？」

卷之三

「誰がいぢる？ 」

「アーティストの心」

ネ
一
え?
」

長編「物語」

「ハアハア、知ることになるって言われたって……う、

「！」
——わ

長老にそう言われた次の瞬間、目の前が真っ白になり、僕の頭に強烈な痛みが走った。その痛みを例えて言うなら、そう、落雷を脳天にくらつたようなそんな強烈なインパクトであった。

「あ、頭が割れるううう——！」

「落ち着け。大丈夫じや、死にやせん。足を止めるでないぞ。」

ネ 「ハアハア・・・・ハアハア、な、なんだつたんですか、今は？」

長 「『覚醒現象』じゃ。」

ネ 「覚醒・・・・現象？」

長 「どうじや？自分が何者であるか、わかつたじやろ？」

ネ 「は？そんな、まさか。」

長 「もう一度ゆつくり考えてみるんじや。」

僕は半信半疑ながらも、自分が何者であるかもう一度考えてみることにした。すると！

ネ 「あれ？！なんだこれ！わかる！わかります！自分が何者なんか、そして自分が何をすべきか！見える！！わはつ！すごい！」

某年12月24日の夜、ある男とある女がとあるベッドの上で『メイクラブ』を行なつていた。そのメイクラブが佳境に入り、男が『女の中』で『フィニッシュ』を迎えた瞬間、僕の人生は『スタート』した。そう、僕はその際に放出された約一億四千万匹の『セイシ』の内の一匹だつたのだ。

長 「我々セイシのDNAに組み込まれている『本能』により、先ほどのような覚醒現象が引き起こされ、我々は瞬時に自らの宿命を悟るのじや。」

ネ 「そうなのですか。・・・・不思議なものですね。」

長 「どうじや？人生の目的がわかつた瞬間に幾分か『チカラ』が湧いてきやせんか？」

ネ 「そういえば、わたくしはあんなに息切れしていたのに、あまり苦しくない！」

長 「そう、それがモチベーションといつ名のチカラじやよ。」

ネ 「目的意識が僕らセイシを強くするんですね。ですが、この熱さはやはり耐え難いものがあります……。これが女性の『あの中』だというのは信じられません。」

長 「我々はここのことを『シーワールド』と呼んでおる。」

ネ 「シーワールド……。」

長 「シーワールドは我々セイシにとつて試練の場じや。まあ先ほどおぬしも言っておつたが、地獄と呼ぶ者もあるでな。」

ネ 「地獄つて、人間が死んでから行く場所だと思ってましたが、人間が生まれる前に通る場所だったんですね。」

長 「うむ。うまいことを言うのう、おぬし。」

シーワールド・試練の道。それは僕らセイシにとつて途方もなく長い道のりであった。例えて言うなら、アリンゴが万里の長城を歩き続けるが如く、である。覚醒現象により、一時的に息を吹き返した自分も徐々にその体力を奪われ、限界を迎えるとしていた。

ネ 「長老、いつたいこの道はどれだけ続くんですか？」

長 「さあのう。」

ネ 「僕、もうだめです。」

長 「しつかりせい。ゴールは必ずあるんじやから。」

ネ 「そんなこと言われても、身体が言つことをきいてくれないんです……。」

長 「立ち止まつたら死ぬぞい。」

ネ 「どうして?!」

長 「ほ?」

ネ 「ビリして、僕らはこんな目に遭わなければならんですか？」

「！」

長 「どうしてと言われても、のつ。」

ネ 「地獄つて悪いことをした人間が行くとこでしょ？僕らが何してたつて言つんですか？」

若 「ケツ！さつきから聞いてりや、甘つちよひこじばつかぬかしゃがつて。」

ネ 「だ、誰だ？」

一匹の会話に突然入り込んできた一匹のセイシ。

若 「おい、そこの貴様、ここが地獄だつて言つのか？」

ネ 「と、当然でしょ！だつて、この熱さ、そしてこの臭い。まわりのセイシ達がうめき声を残して次々と死んでいくこの光景。これを地獄と言わすして、何を地獄と言つんですか？！」

若 「それが甘えつて言つてんだよ。貴様、セイシ達がたどる様々な悲劇の運命を承知してないとは言わせねえぞ？」

ネ 「ど、どういうことだ？」

若 「ふん。一度しか言わねえから、耳の穴かっぽじつてよく聞いてよ。」

ネ 「くつ！」

若 「オレらセイシのほとんどは、『外』で放出されて朽ち果て、また『ゴム』の中で放出されて朽ち果て、あるいは『ティッシュ』の上に放出されて朽ち果てる運命にあるんだよ！」

ネ 「！」

長 「まあ、『口の中』に放出されて朽ち果てるセイシもあるがのう。」

若 「・・・とにかくだ！無数の諸先輩方がその儂い人生を一瞬で終えていった中、オレらは幸運にも『この中』で放出され、今までにこのシーワールドで目的に向かってこの命を燃やせているん

だ！」

ネ「！」

若「セイシが『』に到達できる可能性たるや、天文学的確率の低さだ！幸運中の幸運。まさに奇跡と呼ぶにふさわしい。」

ネ「奇跡……。」

若「つまり、『』は地獄なんかじゃねえ。『』は『天国』なのさ！」

ネ「はつ！－！」

長「そつじやのう。そつ考えれば、確かに『』は天国じや。地獄でもあり、天国でもある。そういう神秘的などいふといふわけじやな。」

若「ちつたあ、わかつたか？」

ネ「たしかに……たしかに僕は何もわかつていなかつたようです。ここに来られたことの幸運を。」

若「今度オレの前で甘つちよろいことを言いやがつたら、オレがこの手で貴様をぶつ殺してやるよ。覚悟しちきな。」

ネ「……。（ゾクツ）」

長「ふつふつふ。さすが『アタッカーセイシ』の隊長。威勢がいいのう。」

若「さあて、そろそろ『やつら』のお出ましする頃だな。」

長「おお、そういえばそつじやのう。」

若「軽くひと暴れしてきてやりますよ。おい！行くぞ、てめえらー！」

アタッカーセイシ達「おおー！－！」

僕に説教をしてきたあのセイシは、他のセイシ達を引き連れて遙か前方に突き進んでいった。

長 「あのう、長老。」

「なんじや？」

ネ 「今あのセイシはどうなんですか？」

長 「あやつは、アタッカーセイシの隊長で、みなかいは『若頭』と呼ばれてゐる者じや。」

ネ 「若頭……ですか。それで、そのアタッカーセイシとこうのは何なんでしょうか？」

長 「むむ？ それがわからぬとこいつとはおぬし、さてはまだ完全に覚醒しきれていないのか？」

ネ 「うへん、どうやらそのようです。」

長 「では仕方あるまい。わしが教えてやる。まずは我々セイシの役割についてじや。」

ネ 「役割？ 役割はもぢりん、『あの『ゴール』を田指す』ことですかね？」

長 「少し異なるの。セイシとひとくわに並べてもその役割は二つのタイプに分かれるんじや。」

ネ 「三つ？」

長 「うむ。ひとつはアタッカーセイシと呼ばれ、敵を殺すことを役割とするセイシ達。別名『矛のセイシ』じや。」

ネ 「矛のセイシ……？」

長 「もうひとつは『ブロッカーセイシ』と呼ばれ、敵の攻撃を防ぐことを役割とするセイシ達。別名『盾のセイシ』じや。」

ネ 「なるほど。」

長 「最後は『エッグゲッターセイシ』じゃな。」

ネ 「エッグゲッターセイシ……。」

長 「これはその名の通り、『ゴールを田指す』ことを役割とするセイシ達じや。」

ネ 「そうだったんですか。全員がゴールを田指すわけではないんですね。」

長 「うむ。」つ見えてセイシの世界もチームプレーヤーがものを語つ世界での。」

ネ 「たしかに、この地獄のよつなシーワールド、一匹のチカラで突破できるほど甘くはなさそうですがもんね。」

長 「そひじやの。それでちなみに言つとくが、わしはプロッカーセイシに属するセイシで、おぬしはエッグゲッターセイシに属するセイシじや。」

ネ 「僕がエッグゲッターセイシ？」

長 「エッグゲッターセイシは、おぬしのよつに比較的幼く、覚醒しきれていなセイシが多いもん、わしのよつな年配のプロッカーセイシが付きつ切りで面倒見ることになるというわけじや。」

ネ 「それですと僕の隣を併走してくれていたんですね。」

長 「年寄りにあまり苦労をかけるでないぞ。ふつふつふ。」

・・・とその時、周囲ではアタッカーセイシと思われるセイシ達が、僕らとは姿形が異なる何者かと戦いを繰り広げている光景が僕の目に入ってきた。

ネ 「あがが僕らの敵ですか？」

長 「そひじや。まあなんと言つかの。」の辺りまで来るところの熱さに順応するセイシ達が増えてきよる。おぬしも慣れてきたんではないか？この熱さに。」

ネ 「ええ、たしかに最初の時に比べれば、耐えられる熱さになつてきたよつな気がします。」

長 「じやう。セイシとしてワソラソク成長したんじや。」

ネ 「本当ですか？それはうれしいです！」

長 「熱さに耐えた我々セイシの次の試練がやつらじや。」

ネ 「やつらは何者ですか？」

長 「ここシーウールドの番人。通称『白い悪魔』じゃ。」

ネ 「白い悪魔……。やつらはなぜ僕らを襲うんですか？」

長 「なぜ？……ふつふつふ。」

ネ 「？」

長 「いやすまんのう。そんなことを聞いてくるセイシはおぬしが初めてだったもんでのう。」

ネ 「はあ……。」

長 「やつらが襲ってくる理由か……。強いてあげるなら、それは我々がこの世界において招かれざる客じやからかのう。」

ネ 「招かれざる客？僕らが？」

長 「うむ。この世界の平穏を乱す異物、侵入者。その我々を排除しようとするのは、やつらにとつての正義といふことじや。」

ネ 「そんなん。」んなに命がけでがんばっている僕らを排除するのが正義だなんて、あんまりですよ。」

長 「ふつふつふ。そんな甘つちようこと言つておると、若頭に殺されるぞい。」

ネ 「！（ビクッ）」

長 「『理由』など、我々にとつてそれほど重要なものではないわ。我々は本能のままに前へ突き進み、それを阻む者を本能のままに打ち倒していく。それがセイシというもののじや。」

ネ 「（ぼそつと）やつぱりここは地獄でしょ、どう考へても……。」

「。」

前へ進むことに白い悪魔の数は増えていった。

ネ 「本能のままに……僕も、戦わなければならぬのか……。」

「。」

鶴 「ネボスケ君は戦えへんよ。」

「え？」

「？」

突然後ろから話しかけてきた一匹のセイシ。

鶴ネ 「君は？」
「僕？僕は『鶴亀』『うセイシ』ですわ。」
「鶴亀君、どうして僕は戦えないの？」
「ネボスケ君はエッグゲッターセイシやからなあ。」
「それはさつき知つたけど。」
「あんな、エッグゲッターセイシつちゅうんは、戦闘能力がゼロやねん。」
「ゼロ？」
「そうやで。エッグゲッターセイシが戦いに行くゆうことは、殺されに行くゆうこっちゃ。」
「じゃあ、あの白い悪魔に襲われたらどうすればいいの？！」
「・・・まあ、逃げたらえんちゅう？」
「逃げる？！・・・僕は、逃げることしかできないのか・・・」
「あはは。そない心配せんでも。そのためにアタッカーとプロツカーがおんのやから。」
「そうだけど・・・。でも自分の身を自分で守れないというのはとてつもなく不安といふか。」
「まあ、そうやな。僕もエッグゲッターやから、その気持ちはわからんでもない。」
「鶴亀君もエッグゲッターセイシだつたんだあ。」
「なんや思つててん？」
「いや、なんやとも思つてなかつた。会つたばつかだし。」
「ふつ・・・・おもういやつちゅな、君。」

アタッカーセイシと白い悪魔との壮絶な戦いは続いていた。僕らはプロツカーセイシに囲まれながら、その戦いをただ見守ることしか

できなかつた。

鶴 「あ～あ、僕もアタツカーやつたらなあ、今頃白い悪魔共をバツサバッサとぶつ殺してんけどな～。」

ネ 「僕も戦うのは怖いけど、こうして見守ることしかできないつていうのは、なんだかとても歯がゆい・・・・。」

鶴 「せやる。でもな、ネボスケ。僕はエッグゲッターとして生まってきたこと、全然後悔してへんで。」

ネ 「どうして？」

鶴 「エッグゲッターは『ホールに到達することを目的としたセイシや。』

ネ 「うん。それはわざと聞いた。」

鶴 「つまりや。人間になれる可能性があるのは僕らエッグゲッターダけつちゅーこつちゅ。」

ネ 「なるほど。確かにそうなるね。」

鶴 「エッグゲッターはセイシの中のセイシ。『ミスター・セイシなんや！』

ネ 「ミスター・セイシ・・・・。そう言わるとなんだか僕もエッグゲッターに生まれてきてよかつたと思うよー。」

鶴 「せやからちゅつとぐらい弱つちくても関係あらへん。」

ネ 「そうだね。でも、なんで僕らエッグゲッターしか人間になれないんだろう？」

鶴 「『受精能力』や。」

ネ 「受精能力？」

鶴 「『玉姫様』と融合を果たすときに必要な能力のことや。これは基本的にエッグゲッターにしか身に付かんらしいで。」

ネ 「玉姫様？」

鶴 「・・・・。自分、ほんまなんも知らんなあ。ちゃんと覚醒したんか？」

ネ 「うーん、それがよくわからないんだ・・・・。」

鶴 「しょーもな。あんな、僕らの最終目的地である『子宮殿』に
おわす玉姫様と僕らの誰かが融合を果たして人間になるんや。」

ネ 「・・・それはなんとなくわかつてた。」

鶴 「わかつてたんかいつ！」

ネ 「ただ、玉姫様とか子宮殿とかいう呼ばれ方してのを知らな
かつたんだ。」

鶴 「そういうことかい。でもな、これはセイシにとっての絶対的
存在理由や。基本中の基本や。完全把握は必須やで。」

ネ 「・・・うん。」

鶴 「・・・ほんまにわかつとんのか？ネボスケはほんまにのん
びりした性格しどんな。」

白い悪魔の執拗な攻撃は止むことがなかつた。しかし、こちらも伊
達に灼熱地獄を耐え抜いてきたわけではなかつた。精銳のアタッカ
ーセイシ達の攻撃力、そしてブロックカーセイシ達の鉄壁な守りをも
つてして、僕らは白い悪魔の群れの中を着実に突き進んでいった。

鶴 「暇やろ？」

ネ 「え？」

鶴 「暇やんな？」

ネ 「まあ、暇と言えば暇だけど、みんな必死で戦つてくれてるの
に、暇だなんて言つわけにはいかないつていうか・・・・。」

鶴 「ふつ。真面目かつ！そんなことわかつとるつちゅーねん。ち
やうねん。」うしてみんなが戦つてくれてる間に、僕らヒングゲッ

ターもやる仕事があるんや。」

ネ 「え、だつて僕らの仕事は玉姫様と融合することだけなんじや
？」

鶴

「それは最後の話や。今や！今僕らが何をすればやと細ひつへ。」

ネ 「うーんと……わからなー。」

「あつとは考へるや。あんな、今僕らがすべき」と、それは・

・・、

「それは？」

「夢を思い描く」とや……」

「夢？ー」

「そいやー夢やーーー！」

「夢つて……なに？」

ずつひける鶴鳴。

「あほー」かわすなー！

「めん。」

「まあええわ。むづ、慣れたわ。あんな、夢につのせーの場合、自分が人間になつてどなこことしたいかを考えるつむーーーちや。」

「人間になつたらどんなことをしたいか……を考える？」

「そいや。素敵やる。」

「そんなこと、考えたこともなかつたよ。」

「まあ、並のエッグゲッターでは、ここまで考へ至らんやうなたけどな。」

「でもちよつと早過ぎるやうな気がするんだけど。」

「あほか。早過ぎる」とあらへん。僕はエッグゲッターにて最も大事なことや思つて。」

「そつかなあ。」

「ま、実を語つと、僕も長老に教えてもらつまでも氣づかんかつたけどな。」

「長老に？」

「せや。長老はなんでも知つてはる生を序引のよつなセイシや。せ

ただのじじいとちやうで。」

長 「ん? なんか言うたかの?」

鶴 「いえいえ、長老はすゞセイシや言つてネボスケに教えてたんですね。」

長 「そつか。プロッカーをかいぐぐつて白い悪魔がおぬしらを襲つてくる可能性もある。警戒を怠るでないぞ。」

鶴 「了解! ・・・・で、ネボスケ。せつきの話の続きをやけど。」

ネ 「セイシにとつて、夢を思い描くのは大事なことだという話だね。」

鶴 「そやそや。ネボスケはまだ夢を持つてないんや。」

ネ 「うん。」

鶴 「よつしゃ。じやあ特別に僕の夢を教えたるわ。参考にしたらええ。」

ネ 「鶴亀の夢? あんまり興味ないけど、でも聞くよ。せつかだから。」

鶴 「『』は嘘でも『興味津々だよ』とか言つとけ。あほ。ま

あええわ。僕の夢はな・・・・、」

ネ 「・・・・。(『』くつ)」

鶴 「僕の夢は、『大女優になる』と『やーー。』

ネ 「ーー。」

へづく

第一部

R指定

(文中に性的な表現が含まれておりますので「注意下セ」)

ネ・・・・・ネボスケ
長・・・・・長老
若・・・・・若頭
鶴・・・・・鶴亀
チ・・・・・チーフ

「どうや。驚いたか。」

「・・・・・単純に『なぜ?』って思った。」

「『なぜ?』やと?・・・・へん、愚問やな。」

「なぜ、『なぜ?』が愚問なの?」

「僕の一一番好きな言葉、知ってるか?」

「え、知らないけど。」

「『本能のまま』や。」

「本能の・・・・・まさに?」

「僕らセイシの生き方をすべて言い表している言葉や。理由なんているかー僕の本能が大女優になりたい言つてる。それだけのことや。」

「理由なんていらない、本能のままに・・・・・か。やつを長老もそんなこと言つてたつけ。」

鶴 「セイシにとつて当然の考え方や。理由が気になるなんてネボスケは相当変わりもんのセイシやで。」

ネ 「そなのかな・・・・。」

鶴 「まあそれはええとしてやな、僕の夢の話の続きをや。」

周囲ではセイシと白い悪魔の熾烈な攻防戦が続いている。

鶴 「まずはな、『カリスマ読者モデル』になんねん。」

ネ 「カリスマ・・・・読者モデル? 何それ?」

鶴 「なんて言うたらええかな。まあ女優になるためのステップのひとつやな。あ〜、もう、説明すんのしんどいわ。いいから聞いとけ。」

ネ 「・・・・・。」

鶴 「でな、僕は女子中高生の憧れの的になるわけや。そうしたら今度は清純派女優として鮮烈デビューや。」

ネ 「・・・・・。」

鶴 「ほんで、新人賞を総なめにしてやな、その内、歌手活動をしたりもするんや。」

ネ 「え、女優だけじゃないの?」

鶴 「そうや。本能のままにやりたい思たことをするわけや。いろんな経験をすることが演技力への糧になるんやで。それからな・・・・、」

ネ 「・・・・・でもひとつ気になることがある。」

鶴 「なんや?」

ネ 「そもそも女に生まれるかどうかなんてわからないんじゃない? 男に生まれるかもしれないし。」

鶴 「うつ。・・・・・あほ言え。僕は女に生まれんねん。僕の本能がそう言つてゐる。」

ネ 「でも例え男に生まれても、役者にはなれるよね。」

鶴 「あほ言えて! 僕は『大女優』にしか興味あらへんねん。それ

以外は問題外や。もし仮に男に生まれたとしても、僕は『性転換手術』をしてでも大女優になつたるわ！」

ネ 「すごい。迷いがない。これが本能・・・・・。」

鶴 「そうや。僕は男に生まれようが、大女優になる。そしてそこに理由なんてあらへん。本能のままに、や！」

ネ 「・・・・・。」

鶴 「人間になるとみんな『理由』や『意味』みたいなもんをちょこざいに考え、悩みよるや。『生きる意味』やらなんやらと。セイシの僕から言わせてもらえば、あほやな。」

ネ 「・・・・・。」

鶴 「セイシのよつに本能のまま生きたつたらええねん。ネボスケもそう思わんか？」

ネ 「うん、まあ。」

鶴 「だから僕は人間になつたら、本能のままに生きる人間になろう思てる。ネボスケも理由や意味ばかり考えるつまらん人間にはなるなよ。」

ネ 「うん、わかった。」

鶴 「よし。じゃあ、僕の夢の話に戻るで。女優で賞を総なめにして、歌手で7週連続オリコン1位を獲るや。そしたら、きりのいいところで仕事を全部ストップして結婚すんねん。相手は、そうやなあ。『クリエイター』的なんがええな。なんか、一番本能のままに生きてそうな氣いするや。ほんと・・・・・、」

鶴亀の夢の話はそのあとも延々と続いた。僕はそれをただ黙つて聞いていた。気がつくと周囲に白い悪魔の姿はほとんどなくなつていた。

長 「よし！ みんなの者、『』苦労であつた。ここいらで一旦休憩を取ろ

うではないか。」

長老がセイシ達にそつ号令をかけると、ここまで生き残れたという安堵の表情を浮かべ、みんなは休憩に入った。と、そのとき一匹のセイシが長老に何やら話しかけた。

チ 「長老、お疲れさまでござります。」

長 「おお、『チーフ』か。いやいや、なんのなんの。おぬしは大変じやつたのう。」

チ 「いえいえ、私は自分の役目を果たしただけでござります。」

ネ 「鶴亀、あのセイシは誰だい？」

鶴 「ああ、あれはチーフや。」

ネ 「チーフ？」

鶴 「そうや。アタツカーセイシの隊長が若頭なら、チーフはブロッカーセイシの隊長といったところやな。」

ネ 「そうなんだあ。」

長 「それで、状況はどんな案配じや？」

チ 「はい。ここに至るまでに約一億四千万匹いたセイシ達の約99.9%が死滅しました。つまり生存率は約0.1%というところになります。」

長 「そうか~。おぬしはこの結果をどう見る？」

チ 「はい。決して悪くない結果であると考えております。」

ネ 「大勢のセイシ達が死んじゃつたんだね・・・・。」

「そうやな。死んだやつらの分も僕らが頑張らなあかんな。」

「でもさ、チーフはどうして生存率とかそんなことがわかるの

？数えたのかな？」

鶴 「ふつ。あほ。チーフを『野鳥の会』みたく言つた！チーフはな、『テレバスセイシ』やねん。」

ネ 「テレバスセイシ？」

鶴 「そ。こく一部のブロッカーセイシには、『離れた場所にいる相手と意思疎通ができる能力』が身に付くらしいんや。」

ネ 「テレパシーというやつだね。」

鶴 「そうや。チーフはうちのブロッカーの中で一番のテレパシー能力の使い手というわけや。せやから、生存率なんて一瞬でわかるらしげで。」

チ 「！…」

チ 「どうしたのじや？」

チ 「長老、大変です！今、『先遣アタッカー部隊』からテレパシーで連絡がありました。」

長 「おお、わしらより先行して進軍しておる部隊じやな。それで、なんど？」

チ 「はい。先遣アタッカー部隊からの情報によりますと、どうやら『先遣』がいる模様です。」

長 「な、なんじやと…？！」

チ 「つまり、我々と『異なるルーツ』のセイシが、我々より先にこのシーワールドに侵入していくことになります！」

長 「なんどこうことじや…？」

若 「女は昨日、他の男とマイクラブをしていた。つまりはそういうことだろ。」

戦いから無事生還した若頭が話に加わってきた。

チ 「若頭か。」

長 「下世話に言えば、そつなるのう。」

チ 「長老、いかがなさいますか？」

若 「イカもタコもねえよ。んなもん、ぶつ殺すのみだろ？が。」

長 「確かに、我々セイシにはそれしか道がないからのう。」

チ 「……。」

若 「おいチーフ。敵セイシ部隊の情報は入つてんのか？」

チ 「……。先遣部隊はほぼ壊滅状態だ。この壊滅のされ具合から推測するに、敵セイシ部隊は我が部隊の三倍以上の兵力を有していると思われる。」

若 「三倍以上だと？……上等じゃねえか。」

長 「まあ、そういうきがるでない。こにはいつたん冷静になつて作戦を考えよ？ではないか。」

チ 「おっしゃる通りです。」

若 「ふん。」

チ 「長老、それでは先遣部隊からの追加情報などを勘案しまして、私のほうからひとつ、作戦の提案をさせていただきます。」

長 「ふむ。」

チ 「まず我々の現在位置をP地点、敵部隊側主要陣営の現在位置をQ地点とします。このP地点からQ地点に移動するには大きく分けて二通りのルートが考えられます。」

若 「二通りだと？」

チ 「ええ。最短で行けるが、敵の真正面からぶち当たることになる『直線的Aルート』と、もうひとつは時間はかかるが、隙をついて敵の側面から突入できるであろう『迂回的Bルート』です。」

長 「なるほど。」

チ 「多少時間はかかりますが、敵部隊との兵力差を勘案し、少しでも勝率を上げるために迂回的Bルートから行くことを私は提案致します。」

若 「はんー。ふざけんな。迂回なんてしてられつかよ。真正面からぶち当たる？上等じゃねえか。それがセイシの生き様つてもんよー。」

チ 「戦とは勝算を推し量つてするものだ。いくらセイシとは言え、

なんでもかんでも真正面から攻めればいいといつものではないぞ、

若頭。」

若 「・・・・・勝算か。勝算ならあるぜ。」

チ 「なんだと? なら、聞かせてもらおうか。」

若 「勝算はずばり、このオレだ!」

チ 「は?」

若 「アタッカーセイシ最強のこのオレが、敵部隊の大将首を電光石火で獲つてきてやるよ。」

チ 「ほひ。それがお前の勝算といつわけか。長老、是非長老のご意見をお聞かせ下さい。」

長 「うむ。まあ、慎重に攻めるに越したことはないの?」

若 「!」

長 「・・・・・が、しかし、時間がないのも事実じゃ。玉姫様を敵セイシに奪われてしまつては、何の意味もないからのひ。」

若 「長老のおっしゃる通りだぜ。モタモタしてたら先を越されちまひ。」

長 「若頭、この戦はおぬしの腕にかかるといふと思ひが、やれそ
うかのひ?」

若 「当然ですよ。セイシに一言はありません!」

長 「・・・・・よし。若頭を信じて、わしらはアルートから攻める
ことにしようべ。」

チ 「長老がそうおっしゃるのなら、我々はそれに従つままでです。
若 「へん。オレは幸せもんだぜ。セイシとして生まれ、こんなに
血湧き肉躍る思いができるんだからな。」

チ 「長老、出発は何時間後ぐらいに致しましようか? みなの体力
の回復を待たなければいけないので、少なくともあと・・・・・
若 「今すぐだ。」

チ 「は?」

若 「今すぐ出発だと言つてている。」

チ 「何を言つてゐるんだ? 試練の道と白い悪魔との戦闘で消耗し

きつたみんなの体力を回復させるために、少なくともあと数時間の休息は必要。それぐらいのことはわかるだろ?」

若 「オレらアタッカーはそんなにヤワじやねえ。てめえらプロッカーはどうだか知らねえけどよ。」

チ 「……なんだと?!

若 「さつき言つたる。オレたちにはのんびりしてる時間なんかねえつて。」

チ 「しかしだな……」

若 「先遣部隊は壊滅こそしたが、先遣部隊との戦闘で敵部隊の陣形は今かなり乱れているに違いない。」

チ 「!」

若 「チャンスは今しかねえ。それとも、先遣部隊の死を無駄にするつてえのか?」

チ 「うつ……。」

長 「……うむ。」

若頭のこの一言でみんなの気持ちはひとつになり、僕らはろくに休息も取らず、直線的Aルートを通り、敵地へ攻撃を仕掛けに向かつた。体力が消耗しきつている状態であつたにも関わらず、僕らは予想以上の速さで敵地に到着し、そして若頭の予想通り、陣形の乱れていた敵セイシ部隊へ一気に奇襲を仕掛けたのだった。

僕らの部隊は数では圧倒的に劣つていたが、若頭の獅子奮迅の活躍と、チーフのテレパシー能力を駆使した緻密な連係プレーを背景にして、短時間の内に敵部隊を制圧し、圧倒的勝利を飾つた。

この戦はのちに、『オケケハザマの戦い』と呼ばれて語り継がれることとなる。

「ひえ。ほんまに勝ちよつたで。・・・。」

ネ「そ、そうだね。数は多かつたけど、案外弱いセイシ達だったのかもね。」

「それはちやつね。向むかって。」
「それが半端なかつたゆうじつ。」

ネー——そうなの?」

「若頭一匹で、何千匹の敵セイシをぶつ殺したかわからん。まったく、敵に回したら恐ろしいが、味方にいてくれたらこれほど頼もしいセイシはおらんで。ほんまに。」

花頭が開けたばかりのところに開けたばかりの花

長「若頭、お前がのぬしまくろくろじやつたのい。わすがのぬしまくろくろじやつる。」

「ふう。いえいえ、まだまだいけますよ。ただ他のアタッカーのやうなつどもは相当くばつてますがね。半田ぐらいいはまともに動けないんじやないですかね。」

長「えひじやのう。だが、本当にみなく頑張つたのう。玉姫様のおわす子富殿はもうすぐじや。」一いつかり休息を取つたのちに向かおう。

長「さあて、あとは生き残つた敵捕虜セイシの処遇をどうするか
じやな。チーフよ、敵の生き残りはどうのくらこおるんじや？」

「ん？ チーフ？」

「…・は・申・し・訳・あ・り・ま・せ・ん。」
「どうしたのじゃ?」

チ 「今しがた、後方に残つて防衛線を張つてゐる『後方プロッカ一部隊』からテレパシーによる連絡がありました。」

長 「ほう。それでなんと?」

チ 「大変申し上げにくいのですが・・・・、」

「なんじやい。勿体ぶらんと言え。」

チ 「はい。新たな敵セイシが現れたということです。」

長 「な、なんじやとー?！」

チ 「しかも、後方部隊が張つていた第一防衛線、第一防衛線を共にいともたやすく突破されました。敵は相当の兵セイシであると言わざるを得ません。」

長 「なんということじや・・・・。」

若 「あの女、やつてくれるじやねえか。三夜連続つてわけかよ・・・」

・・・。」

鶴 「信じられへん。三夜連続別の男とつて、ありえへんや。」

「発情期だつたのかな。」

「あほ。サルやあるまいし。あ～あ、今度こそ、僕ら終いや。」

ネ 「まさに『セイシのバトルロワイヤル』だね。」

鶴 「のんきなこと言つとる場合か！」

動搖を隠せないセイシ達に長老が語りかけた。

長 「みんなの者、よう聞け。今、新たな敵セイシ共が後方から向かつてきておる。チーフ、やつらの予想兵力数はどのくらいじや?」

チ 「はい。我々が先の戦で半数以上の犠牲セイシを出したことを考えますと、敵セイシの兵力数は最低でも我々の七倍以上だと考えねばなりません。」

長 「そうか。みんなの者、聞いての通りじや。次の戦は我々にとって、非常に分の悪い戦にならう。」

一同 「・・・。」

長 「しかも、みなのが体力は限界を超えてある。おそらくいつまでもつちもいかん状態というわけじゃ。」

長老のその言葉を聞いて、落胆の色を隠せないセイシ達。

長 「そこでわしは考えたのじゃが、エッグゲッター達を先行させて行かせよつと思つとる。」

ネ 「え、僕らだけ?」

長 「そりぢや。戦に参加していないエッグゲッター達は比較的体力が残つてゐるぢやろうから。」

ネ 「いや、僕らだつて、ここまで必死に走つてきてへ口へ口ですよ。。。。」

若 「甘つたれたことぬかしてんじやねえぞ。」

ネ 「。。。。はい。」

長 「それにこの先にさ、もう白い悪魔もあまり出んじやねうから、エッグゲッター達を単独で行かせても大丈夫じゃろつと踏んである。」

鶴 「この先は僕らエッグゲッターだけの戦いが始まるゆつわけですね。」

長 「うむ。わしらブロッカーとアタッカーはこの場にとどまり、玉碎覚悟で敵を一秒でも長く足止めすること。これが我々に残された最後の使命じや。みなのがそう心得てくれ。」

長 「ネボスケ、ちょっとこいつに来なさい。」

ネ 「はい、なんでしょう?」

長 「おぬしに渡すものがあるんじや。これは我々一族に代々伝わる由緒ある『指輪』じゃ。」

ネ 「指輪ですか?」

長 「この指輪はセイシを人間へと導くチカラがあると言われてお

る。それをおぬしに託そつ。」

ネ 「え、なぜこれを僕に?」

長 「一番可能性を感じたエッグゲッターにこれを持すこと。それがわしの隠された役目なんじゃよ。」

ネ 「僕なんかでいいんですか? だつてもつと他に……」

長 「おぬしは自分の可能性に気づいていないだけじゃ。わしはおぬしをひと目見たときから、なにか光るものを感じておつたよ。」

ネ 「でも、でも、こんなすごいものを託していただきて、それで人間になれなかつたら、僕はみんなに申し訳なくて……」

長 「行け。時間がない。」

ネ 「でも、でも……」

長 「おぬしが道半ばで朽ち果てるようなことがあれば、わしの目が狂つておつたというだけのこと。おぬしは気に病む必要などないんじや。」

ネ 「……。」

長 「本能のままに、じや。」

ネ 「……わかりました。」

チ 「……。」

僕は長老から指輪を託され、そして他のエッグゲッター達と共に先を急いだ。その場に残つた僕らのセイシ部隊と後方からやつてきた新たな敵セイシ部隊との戦いは、壮絶な天下分け目の一大決戦となり、のちに『セイギガハラの戦い』と呼ばれて語り継がれることになるのだが、先を急いだ僕にはどんな戦いが繰り広げられたのか、詳しく述べられない。

ネ 「鶴亀、おしゃべりな君がなんであつてから黙り込んでるの?」

鶴 「今はおしゃべりしてゐる場合とちやう。敵が襲つてくるかもわ

からんから神經研ぎ澄ませなあかんねん。」

ネ 「そつか。そつだよね。僕ら戦鬪能力ゼロなんだもんね。」

鶴 「・・・ほんまは悔しいねん。」

ネ 「え?」

鶴 「長老が最後に選んだのが、僕やのうてネボスケやつたのがむつちや悔しいねん。」

ネ 「・・・。」

鶴 「でも安心しい。僕もセイシの端くれや。その指輪を奪おうとかそんなことは考えてへん。他の連中も同じ考え方だと思つ。」

ネ 「・・・。」

鶴 「だが、僕は僕で最後まで最善をつくすで。指輪があつが、なかろうが、や。」

ネ 「鶴亀、僕は君のまつが・・・、」

と、その時、後方から一匹のセイシがやつてきて僕らに口笛をかけてきた。

チ 「待ちたまえ。」

チ 「え?・・・・・チーフ?」

チ 「なんで?・・・・なんでチーフがこんなことおんの?」

チ 「君らに追いつくためさ。」

チ 「いや、でも戦のまつはどないなつたんすか?」

チ 「知らない。」

チ 「は?・・・・だつて、戦の司令塔であるあなたがいなければ、みんなはどないして戦うたらいいんすか?」

チ 「はつはつは。今頃、困つてゐるだらうな、みんな。」

チ 「・・・氣でも狂いましたんか?」

チ 「いいや。私の目的は最初からひとつだ。それは指輪だ。」

チ 「!」

チ 「その指輪のために、私は我慢して長老に仕えてきたのだよ。」

指輪を手放した長老は私にとつて、ただの皿の上のタンゴブでしかない。

鶴 「なんやで？」

チ 「それと邪魔者の若頭。あの『匹は死んでももうちたほうが、私にとつてはありがたいのさ。』

鶴 「チーフはん、長老らを裏切る気なんか？」

チ 「はつはつは。裏切るもクソもない。我々は『たまたま同じバスに乗り合わせた乗客』に過ぎない。すべては見せかけなのさ。見せかけの連帯感。見せかけの友情。』

鶴 「あほか！セイシにだつてなあ、やつていいことと悪いことがあるんや！」

チ 「くくく。鶴亀、君の最も好きな言葉はなんだつたかな？」

鶴 「そ、それは……。」

チ 「『本能のままに』、だつたね。私は今、本能のままに行動しているに過ぎない。』

鶴 「くつ・・・。」

チ 「さあネボスケ君。君が長老から託されたその指輪、私に譲つてもらおうか。』

ネ 「ちよつと待つてくださいよ。長老に託されたこの指輪、そう簡単には渡せません。それに第一、ブロックカーのあなたがこの指輪を手に入れてどうするつていうんですか？」

チ 「その指輪さえあれば、ブロックカーの私でも人間になれる。私はそう確信している。さあ渡しなさい。』

ネ 「嫌です。』

チ 「そつか。なら殺して奪つまでも。』

ネ 「！」

鶴 「ネボスケ、やつは本氣や。』のままやと、戦闘能力ゼロの僕らエッグゲッターは全滅する。』

ネ 「せつかくここまで来たのに……。』

鶴 「そうや。子宮殿はあともう少しなんや。せやからネボスケ、

よ、う聞
け。

ネ
一
う、
うん
「

「僕らでやつをなんとか足止めしたる。その間にネボスケは先に行くんや。」

ないよ。」

鶴一 あほ。ええか。こういう状況に陥った場合、指輪を託されたお前を生かすことを優先すんのが、セイシとしての僕らの使命や。

それでも……

「長老が？」

「ああやつや。おおやくもわれを置んでおなかや。」

て其の胸の夢はどの如き

「はよ行かんかいつ！あほ！ぼけ！かす！ちんたらしてつと、

ほんまほん倒すで!!!!

鶴亀にそう発破をかけられた僕は、決心のつかぬまま、半ば強引に押し出され、そして走り出した。そう、考へることを止め、走り出してしまつたのだ。みんなを置き去りにして・・・。

僕は自分に残されたチカラを振り絞つて、全力で走った。しかし、非情にも、ものの数分もしない内に、僕はチーフに追いつかれた。

「 つるぎ。 まじめに うなづく。」

「ハア・・・・・ハア・・・・・。」

チ「彼ら、私を足止めするつもりだったようだけど、所詮は戦闘能力ゼロのエツグゲツター。クソの役にも立たなかつたようだね。

くくく。

ネ 「鶴亀を……殺したのか？」

チ 「あの夢見るロマンチストは、あの世で永遠に夢を見続けてい
ればいいのや。」

ネ 「鶴亀……。」

チ 「さあ、君も大人しく死になさい。」

ネ 「（どうすればいい……。万事休すなのか。いや、最後まで諦めちゃだめだ。みんなに報いるためにも。……戦つたら、負ける。では誰かに助けを呼べないだろうか。……呼ぶ？……。・テレパシー！僕にもテレパシーが使えたら。ひょっとしたら使えるかもしない。長老、助けてください。誰でもいい。助けてください。助けてください。助けてください……。）」

テレパシーのやり方など、全くわからなかつたが、僕は必死に心中で助けを呼び続けた。

チ 「なんだなんだ。テレパシーの真似事か？くくく。無駄だ。そ

れに今から呼んだところで、時すでに遅しだな。」

ネ 「（タスケテタスケテタスケテ……。）」

チ 「あの世で鶴亀とゆつくり夢でも語り合つていなさい。じゃあな。」

そしてチーフは僕に剣を振り上げた。

つづく

(文中に性的な表現が含まれておりますので「注意下セ」)

ネ・・・・・ネボスケ
長・・・・・長老
若・・・・・若頭
チ・・・・・チーフ
イ・・・・・イブイブ
キ・・・・・キリスト

チ 「ぐざいやああああああああ！」

恐怖のあまり、田をつぶつてしまつた僕の耳に、チーフのものと思われる断末魔のような声が聞こえてきた。目を開けて見てみると、そこには身体を切り裂かれたチーフと、その横になんと若頭が立つていたのだった。

若 「チーフさんよう、味な真似をしてくれるじゃねえか。おかげでさすがのオレも死にかけたぜ。」
チ 「うつ・・・・・なぜ、お前がここに？」

若 「貴様に制裁を下されるためだよ。死ね！」

チーフことじめを刺す若頭。息絶えるチーフ。

ネ 「あのう、若頭、助けてくれてありがとうございます。」

若 「あん？」

ネ 「ひょっとして僕のテレパシーが通じて、助けに来てくれたんですか？」

若 「テレパシー？ 何のことだ。それに貴様を助けたわけじゃねえし。」

ネ 「え、じゃあほんとにただチーフを殺すためだけに来たんですか？」

若 「ああ、そうさ。それともひとつ。」

ネ 「？」

若 「指輪だ。」

ネ 「！」

若 「このやういふ指輪田當てで、抜け駆けしやがったんだろ？」

ネ 「そう言つてましたが・・・。」

若 「こいつ、あほだな。例え指輪を持つても、受精能力がなければ、玉姫様と融合することなんてできねえのに。」

ネ 「え、やはりそんなんですか？なら、アタッカーである若頭が指輪を手に入れても意味ないのでは・・・。」

若 「そうさ。・・・わつきまではな。」

ネ 「わつきまで？」

若 「ただでさえ我が部隊のセイシ達は消耗しきっていたのに、このくそが抜け駆けしやがったせいで、部隊の統率性まで失っちまつたんだ。戦場はまさに修羅場と化した。」

ネ 「・・・。」

若 「このオレも何度も死にかけたよ。生死の境をさまよい、それでも戦い続けていると・・・身に付いたんだよ。このオレにも。」

ネ 「何がですか？」

若 「受精能力だ。」

ネ 「そ、そんな？！受精能力はエッグゲッターだけが身に付けられるものなのですか？」

若 「アタッカーセイシに受精能力が身に付くことも、まれに起こり得るんだよ。」

ネ 「そんな……。」

若 「受精能力が身に付いたとわかつた時、オレは悟った。」

ネ 「……。」

若 「アタッカーとしての最強のチカラと受精能力の両方を兼ね備えたオレは、『伝説のスーパーセイシ』なのだと。」

ネ 「伝説の……スーパーセイシ……。」

若 「つまり、玉姫様と融合を果たすのはオレしかいない、とな。」

ネ 「そんな、そんな……。」

若 「どうだ、指輪を渡す気になつたろう。」

ネ 「……でも、若頭がいくら伝説のスーパーセイシであろうと、この指輪は長老が僕に託してくれたものなんです。それに鶴亀や他の死んでいったエッグゲッターのみんなの思いも、この指輪には詰まつているんです！」

若 「へつ。そうかよ。なら冥土の土産にもうひとつ面白い話をしやるよ。セイシにはな、あらかじめ『男』として生まれるか、『女』として生まれるかっていうのが決まつてるんだぜ。」

ネ 「なんだつて？！」

若 「俗に言つ『オトコセイシ』か『オンナセイシ』かつてことだ。ちなみにオレはオンナセイシだ。貴様は見たところ、オトコセイしだな。」

ネ 「……僕がオトコセイシ？」

若 「よおく想像してみやがれ。貴様のような軟弱なセイシが人間の男として生まれて、いったいどんな活躍ができるってんだ？あん？」

ネ 「そ、それは・・・・・。」

若 「落ちこぼれのひき」もつで、一ノートになるのが関の山だらうな。」

ネ 「！」

若 「一方、アタッカーセイシ最強のオレはと言えば、社会でバリバリ活躍する強い人間の女になるに決まつてんだ！」

ネ 「！」

若 「これからは、強い女の時代だ。軟弱な男など誕生したところでクソの役にも立たねえんだよ。」

ネ 「うつ！」

若 「状況は変わつたんだ！今なうきつと長老もこのオレに指輪を託していただろう。さあ、おしゃべりははははまでだ。うじろからは敵が迫つていやがる。わざと死にな。」

僕は若頭の言葉に反論することができなかつた。あろうことか納得してしまつたのだ。もはや抵抗する気力も起きなかつた。いや、抵抗したところで、相手はアタッカー最強の若頭。どうすることもできないだろう。僕がそんなあきらめの境地になつてゐる時、ある異変が起きた。

気配を消して若頭の後ろに忍び寄る黒い影。そしてその黒い影は後ろから若頭の急所にナイフを突き刺した。

若 「うぐはあつ・・・・・だ、誰だてめえ？！」

長 「若頭、まだまだじやのう。」

なんとその黒い影は長老だつた。

ネ 「長老?...」

若 「ちょ、長老だと……?…なぜだ! あんたみたいな老いほれがあの修羅場と化した戦場で生き残れるはずが……」

長 「ふつふつふ。なめてもらつては困るの!」

若 「そ、それに気配を感じさせずにつのオレの後ろに回り込むなんて……老こぼれになじでできるわけがねえ……の!」

長 「自惚れ過ぎじゃや。若頭。」

若 「オレは最強のはず……。」

長 「ふつふつふ。おぬしも聞いたことがある!『漆黒の暗殺セイシ』の噂を。」

若 「あん? ああ、聞いたことあるぜ。そいつに一度狙われて助かった者はいない……と言われた程の伝説の最強アタッカーセイシだろ?」

長 「うむ、セイシや。」

若 「だがそいつは、とつぐのとうに死んでるはずだが……。」

長 「そいつは暗殺稼業から足を洗い、一度死んだと見せかけ、そのちプロッカーセイシへと転職。若者セイシの育成にその半生を捧げることになるんじや。」

若 「プロッカーセイシへと転職だと……?…まあ、まさか……。」

長 「やう、そのまさかじや。」

若 「あ、あんたが漆黒の暗殺セイシだといつのか?」

長 「現在最強セイシと呼ばれるおぬしの背後に回り込めるのは、わしが『わしが漆黒の暗殺セイシ』であったことを証明したと思うがの。」

若 「うぐはあつ……な、なんてこつた……。」

長 「全盛期に比べて体力はかなり落ちたが、『わしが』のことは

朝飯前じや。」

若 「だが、なぜ?…なぜだ!…最強のこのオレが…玉姫様と融合

「ふさわしいはずだ！」

長
・
・
・
・
・
おぬしは危険じや。人間になつたら何をしてかすか
わからん。わしの本能がそう言つとるんじや。
「

若「ふ、ふざけんなじじい・・・。オレのような『できる女』がこれから時代に最も必要な人材なんじやねえか・・・うつ・・

「アーティザン」

若頭にとじめを刺す長老。息絶える若頭。

「ネボスケ、何をボヤッとしてある?」

ネ
「え、は、はい？」

長後ろから敵が迫つてある。ほよう、行くのじや。

「わしはもうだめじや。体力が高

そろそろ寿命のよひじや。」

「おぬいグリーパン」で呼ぶ。シジやろうが。

「僕のテレパシーが？！・・・通じたんですか。

もう一緒には行つてやれんが、子宮殿はすぐそこじゃ。大丈

「…………長老、僕に指輪を託したのは間違えでしたよ。」

長
「む？何を言つてゐる？」「？」

「さあ、若頭が言つていいだよ。」は

『…………。』

「鶴亀のようだ、夢を思い描いているわけでもない。自分が何をいひつぱうだい」と。

卷之三

ネ 「それに、それに、僕は卑怯者なんです！ だって、さつき、鶴亀と他のエッグゲッターたちを見捨てて、一人で逃げてきたんですから！！」

長 「もうわしは何も言わんぞ。」

ネ 「え？！」

長 「わしはさつき、本能のままにゆけと言つたじやろ？ じゃからあとは、おぬしが決すればよい。人間になろうが、ここで朽ち果てようが、の。」

鶴亀たちを見捨てて一人逃げたことに対する後悔が今頃になつて、僕の胸にこみ上げてきた。

長 「……長老、ひとつ聞いていいですか？」

ネ 「さつきから、目から不思議な液体が溢れ出してきて止まらないのですが、これは何なんでしょう？」

長 「そ、それは、おぬし！？」

ネ 「生暖かいこの液体が止めどなく溢れてくる。僕は病気なんでしょうが？」

長 「それは『涙』といつものじよ。」

ネ 「涙……？」

長 「そうじや。人間の世界で『最も尊い』とされておるものじよ。わしも長年セイシをやつておるが、涙を流すセイシを見たのは、おぬしが初めてじよ……いやはや。」

ネ 「僕はただ、自分の不甲斐なさに腹が立つて、腹が立つて……」

「。」

長 「やはりわしの目に狂いはなかつた。おぬしは他の者を思いやる気持ちを持つてある。これはセイシの世界では奇跡的なことなの

じゅ。「

ネ 「思いやる・・・気持ち?」

長 「鶴亀たちもそれがわかつていたからこそ、おぬしに希望を託したのじゅよ。」

ネ 「鶴亀たちが・・・?」

長 「さあ、ネボスケよ。迷わず行くのじゅ。行けばわかるぞい。」

ネ 「!」

僕はその時初めて『本能』というものを感覚的に理解できたような気がした。悩む必要などない。そう、選択肢は二つしかないのだ。『行きたい』か、『行きたくない』かだ。そして僕は、

行きたいのだ!

人間になりたいのだ!

人間になつていろいろなことをやつてみたいのだ!!

ネ 「わかりました、長老。僕は、本能のままに行きます!そして必ず人間になつてみせます!!」

僕は吹っ切れた気持ちでそう言い放つたが、その時長老は、すでに息絶えていた。・・・悲しさと寂しさが胸にこみ上げてきたが、それをぐつとこじらえ、長老に一礼をし、僕は再び前へ走り出した。

決して後ろを振り返ることなく。

程なくして、僕は子宮殿らしき建造物に到着した。周囲にはそこかしこにセイシ達の亡骸が転がっていた。

ネ 「ついに来た。」ヒが子宮殿……なのか？」

子宮殿らしき建造物の前に立つと、僕を迎えてくれるかのよう^リに扉が自然と開いた。そして僕が中に入ると、扉は自然と閉じた。中はとても広く、ひんやりとしていて、そして静寂に包まれていた。これまで通ってきた灼熱地獄や、戦場での乱れ飛ぶ怒号などが嘘であつたかのようだ。

しばらく前へ進んでいくと、そこには先ほどより大きな扉がそびえて立っていた。そしてその大きな扉の前には一匹のセイシがたたずんでいた。

イ 「やつと来たのであるな。」

ネ 「君は？」

イ 「自分は23日にこのシーワールドに送り込まれたセイシの一匹である。そういう君は24日に送り込まれたセイシの一匹なんであつた？」

ネ 「はい、そうです。あれ、でも君らの部隊は僕らの部隊に滅ぼされたんじゃ？」

イ 「君らとの戦闘になる前に一部のヒッグゲッター達は、先行して子宮殿に向かっていたのである。」

ネ 「そうだったんですか。考えることはみんな一緒かあ。」

イ 「一緒にあらうとは？」

ネ 「君らの部隊を滅ぼした後、後方からさうに新たな敵セイシ部隊がやつてきたんです。」

イ 「なんと！」

ネ 「もはや勝てる見込みが少ないと見て、僕らエッグゲッターのみを先にこの子宮殿に向かわせ、残りのアタッカーやブロッカー達は玉碎覚悟で敵セイシ部隊を食い止める、とこりう作戦に出たのです。」

イ 「なるほど。つまり、君の後ろにいるセイシが、その新たな敵セイシの一匹とこりうわけであるな？」

ネ 「え？」

後ろを振り向くと、そこには一匹のセイシが立っていた。

キ 「やあやあ、お一方。こんなとこでのんびりおしゃべりしちゃつてゐとこを見ると、まだ誰も玉姫様と融合を果たせていないといふこゝたね。」

ネ 「君が後方からやつてきた新たな敵セイシ部隊のセイシ……。」

キ 「そういうお前さんは、オレらの前に立ちはだかつた敵セイシ達の一匹といふこゝたな。そんでもそつちのセイシ君は？」

イ 「23日に送り込まれたセイシである。」

キ 「なるほどなるほど。つまり、異なるルートから生まれた二匹のセイシが勢揃いしたつてわけだ。」

ネ 「・・・・・。」

キ 「とつあえず、自己紹介でもしとくかい？オレは25日、つまりクリスマスに送り込まれたセイシだ。名前はそうだな。『キリスト』とでも呼んじゃつてくれ。」

ネ 「キリスト・・・・。」

イ 「自分は23日に送り込まれたセイシである。名は『イブイブ』

とでも呼んでもらいたいのである。」

「僕は24日、つまりクリスマスイブに送り込まれたセイシです。名前は『ネボスケ』とあります。」

「は？ ネボスケ？ なんでも～？」

「寝坊したので、そう名付けられました。」

「くつははは。ダサつ。てつきり、『イブ』とか『トウエンティフオーワー』とかいう名前だと思つてたら、ネボスケって。」

「笑わないでください。」

「おお、こりや失敬。」

「名など、ただの記号にすぎないのである。」

「そりやそうだな。」

「あのう、先ほどからひとつ気になつていたのですが、

「ん？ なんよ？」

「どうしてお一方とも、お一匹なんですか？」

「うん？ お前さんだつてお一匹じゃねえか。」

「そうですが、僕の場合はちよつと事情があつて、一匹になつてしまつたのです。」

「その事情といつのは、ひょつとして『仲間割れ』のことであるかな？」

「あ、そ、その通りですが……。」

「やはりそうであつたか。君は、子宮殿へと続くあの道の名を知つてゐるであらうか？」

「子宮殿前のあの最後の道のことですか？ いえ、わかりませんが。」

「あの道は、通称『仲間割れの道』と言われているのである。」

「仲間割れの……道？」

「そうである。セイシ達は子宮殿を前にすると、人間になりたいという欲望が最高潮になるのである。そして必然的に仲間割れが起つるのである。」

「イブイブさんの部隊でも仲間割れが？」

イ 「無論。」ここまであんなに協力してお互に頑張ってきた仲間達が結局最後は殺し合つことになるのである。」

ネ 「・・・。」

イ 「戦闘能力を持たない我々エッグゲッターの殺し合いとは、実際に醜いものなのである。自分はただそれを傍観していたのである。」

ネ 「止めようとは思わなかつたのですか？」

イ 「もはや止めようがないであろう。それがセイシとしての本能なのであるから。結果、傍観していた自分が一匹だけ残り、あとは死んでしまつたのである。」

イ 「そうだつたのですか。キリストさんの部隊でも仲間割れが？」
キ 「ああ、確かに仲間割れは起つた。しかし、おかげさまでうちの部隊は生存数が多かつたもんで、相当数のセイシ達が生き残つてこの子宮殿に到着したわ。」

ネ 「え、ではなんでキリストさんはお一匹なんですか？」

キ 「うん、それがさ、最初にオレが子宮殿に入ると、自然と扉が閉まつちましたんだ。それ以降、扉はウンともスンとも言わなかつたつてわけ。」

ネ 「じゃあ子宮殿の外には、」

キ 「ああ、うちのセイシ部隊が待ちぼうけ食つてゐるだろ?」

ネ 「それで一匹で来たんですか。」

キ 「まあな。うちの部隊全員で入ることができるれば、今頃お前さんらをぶつ殺しーの、その扉を開けーの、玉姫様と融合しーのつてスマーズに出来てたんだろ?けどな。そつまくはいかんらしい。」

ネ 「僕らを殺すつもりだつたんですか?」

キ 「当たり前つてやつ。敵なわけだし。でも一匹だから仕方なく、こうやつて平和的に会話を重ねてゐるつてわけよ。」

イ 「キリストとやら、残念であつたな。これは自分の推測であるが、この子宮殿には『定員制限』があるのであらうと思われるるのである。」

「定員制限だと？」

イ
— そうである。こゝは玉姫様のおわす神聖なる子宮殿である。

迷惑千万なのである。

「まあ、言われてみれば、そうだな。」

「よつてこの子宮殿には定員制限システムが設けられているの

である。そしてその定員数は、三回で二〇人とのである。

ておこでよかつたぜ。ふ。

キ 「それで本題に入るけどさ、オレとネボスケがここに来るまで、随分時間があつたと思うが、イブイブは今まで何してたわけ？」
イ 「確かに時間はたっぷりとあつたのである。そして、玉姫様と融合を果たせるのは自分なのだと確信していたのである。」

イ 「その大きな扉を開

キ 「でつけえ扉だこと。」

イ 「そうしたら、開かないのである。」

「え？」

「君らがーー」に来るまで相当な時間があつたのである。ずーつ

と開ける努力をしていったのである。」

キ - ゼニシテ あるか

「……」謫を真似してほしくないのである

「アホがアホでいいやつだよ。」

全身全靈の力を込めて、扉を押すキリスト。

えな。おいネボスケ、お前さんもやつてみな。

「は、はい!」

全身全靈の力を込めて、扉を押すネボスケ。

キ「まさか、『引寄せだつ

「 こつたいどりこいひたるな。」

「おそれこの扇の奥か『玉姫様の間』なのであるが、この扉が開かなければどうにもならないのである。」

「おいおい、まさかこここまで来て門前払いってことはねえよな。

イ 「いや、あり得ない話ではないのである。玉姫様は気まぐれなお方だと聞いたことがあるのである。」

「そ、そんな。」

ギーすへでは王様の御心次第でね。どんなに苦労してここまでたどり着いたとしたって、何の意味もねえ。世知辛い世の中よ。」

「用今はいい、放時間从うも試行錯誤を繰り返しつづけよ」と待つてください!諦めるのはまだ早いですよ!」

「自分はがれこれ 数日間は二重言葉を絶り込めたのである。それで駄目だつたのである。つまり、この扉は今開かないといふことである。」

「でも……。

「よおし、オレは気持ちを切り替えるぞ。セイシの寿命は七日

間と言うから、残りの人生を「ここでどう過すか」を考えるぜ

ネ 「キリストさん、切り替え早過ぎますよ。ちょっと待ってください。イブイブさん、さつきこの子宮殿の定員が三匹だと書いてましたよね？」

イ 「確かに言つた。三匹田、つまりキリストが入つて以降、入り口が開かない所以あるから、定員は三匹であることが予想されるのである。」

ネ 「この三匹といふ人数に僕は意味があると思つんです。」

イ 「意味だと？」

ネ 「つまり、三匹でチカラを合わせて扉を開けるんじゃないかつて。」

イ 「三匹で？」

イ 「チカラを合わせてだと？」

ネ 「そうです！」

キ 「ふつ、くつはははは！ その発想はなかつたぜ。ネボスケは面白いことを考えやがるな。」

イ 「ちよつと待つのである。味方同士ならいざ知らず、敵同士でチカラを合わせるなど、自分は！」免被るのである。」

ネ 「なんですか？！ もはや、敵だ味方だと言つてゐる時ではないでしょ！」

キ 「異なるルーツより生まれし三匹のセイシ達が、ここに来て協力し合つてわけか。くつははは。新しけ、それ。オレは好きよ、そういうの。」

イ 「自分は我が部隊の代表のつもりで、今ここに立つてゐるのである。敵セイシ共とチカラを合わせるなど、死んでいつた仲間達が許してくれるはずもないであろう。」

ネ 「イブイブさん！ みんなの願いはなんでしたか？！」

イ 「願いだと？ それは、人間になることに他ならないのである。」

ネ 「だったら！ だったら、今僕らがすべきことは、お互いいがみ合つてじやないはずです！」

イ 「ぬつ！」

「今僕らがすべきことは、なんとしてもこの扉を開けることで

す
る！

イ 「うぬう・・・・。」四でどうにかなるものとは思えぬが、悔いを残して朽ち果てるは、自分の望むところではない。やつてみよ

へてはなしだ！」

し 総文は開けてやうにし、文

「死んでいいたみんな、自分に力を！」

三四匹は持てるチカラをすべて使って、懸命に扉を押した。しかし、扉はびくともしなかつた。

キ「やつぱ、駄目かよ・・・。」

イ 「我々は来るタイミングを間違えたのである。よって、この扉は今決して開かれないと」とである。」

かな。」「一しあねえしあねえ、あと、残りの人生をどう過こす

お詫びの言葉を待つてください。

「また何か言ひのてあるか?」

井へわざかに詮め懸にせん」

「今のは『屋を開けたい』といふ気持が足りていなかつたんです。」

キ 「はあ？」

イ 「気持ちだと？ 気持ちでどうにかなる問題ではないであります。」

ネ 「僕は子宮殿に来る前、殺されかけました。」

イ 「……仲間割れであるな？」

ネ 「はい。その時、何度も心の中で叫びました。『誰か助けて！』

と。」

キ 「それで、助けは来たのかよ？」

ネ 「はい。僕の気持ちが通じて、あるセイシが助けに来てくれました。そのおかげで僕は今ここにいます。」

イ 「それはつまり、テレパシー能力とこうことであるか？」

ネ 「おそらく、そうなんだと思います。」

イ 「テレパシーは本来、ブロッカーセイシ達が得意とする能力である。エッゲゲッターである我々にできるとは到底思えないのであるが……。」

ネ 「テレパシーなんて難しいことは僕にもよくわかりません。ただ、大切なのは『強く思うこと』だと思つのです。」

キ 「強く願えば、通じるってわけか。」

ネ 「さつきのは気持ちが足りていなかつたのかもしれないです。イ 「気持ちが足りていないと言われてもな……。我々はどうしたらいいのであるか？」

ネ 「僕らの願いは、この扉を開け、玉姫様とお会いし、そして人間になることです。」

キ 「そうだな。」

ネ 「その気持ちを中にいるであらう玉姫様に精一杯飛ばすんです！」

イ 「つまり、心の中で玉姫様へ向けて気持ちを精一杯伝えるということであるな？」

ネ 「そうです。そうすれば絶対に気持ちは通じるはずです！」

キ 「……よし、こうなつたらとことんお前さんに付き合つてやるよ。ただし、これが最後だ。これで駄目なら、ジ・エンドだ。」

ネ 「わかりました。」

キ 「よしあしゃ…泣いても笑ってもこれが最後だ。てめえら、死ぬ氣で押しやがれ…」

ネ 「そして、玉姫様に僕らの気持ちの強さを精一杯伝えてやりましょー！」

イ 「玉姫様ああああ…」

ぐおおおおおおおおおおおおおお…

うんこすまうううう「うううううううううううう…」

ふんぐううううう「うううううううううううう…」

僕らは、扉を懸命に押しながら、心中で『人間になりたい』という気持ちをまだ見ぬ玉姫様に向けて必死に念じ続けた。それは、決して相容れることのない異なるルートより生まれし三セイシの気持ちがひとつになった瞬間でもあった。そしてその時…

キ 「…！」
イ 「…！」
ネ 「…！」

三四は頭の中で、同時に異なる言葉を聞いたのだ。

? 「ウフフ。ア・ケ・タ・ゲ・ル。」

その言葉が聞こえた次の瞬間、今までびくともしなかったこの大きな扉が音を立てて開かれていった。

完結編へつづく

第四部（完結編）

R指定

（文中に性的な表現が含まれておりますので「注意下セ」）

ネ・・・・・ネボスケ
イ・・・・・イブイブ
キ・・・・・キリスト
じ・・・・・じい（執事）
玉・・・・・玉姫様

キ 「ハアハア、ハア・・・・。」
イ 「・・・・・。（じくつ）」
ネ 「ついに、扉が開かれていぐ。・・・・行きましょ。」

ついに、玉姫様の間へと続く最後の扉が開かれた。

三匹は玉姫様の間を奥へとゆっくり歩いていった。本能のままに生きるセイシであるなら、玉姫様をものにするため、我先にと走り出すと思うかもしれないが、「そのようなはしたないことはできない」とセイシ達に感じさせてしまつほどどの厳肅な雰囲気が、玉姫様の間には漂っていた。

しばらく進んでいくと、正体不明の何者が待ちかまえていた。その何者かは僕らセイシというよりもどちらかといつて白い悪魔に似た姿形をしていた。

「よひでおいで下さいました。」

「あなたは？」

「私めは玉姫様の世話役を仰せつかつてこの『執事』でござります。わざ、玉姫様がお待けでござります。」

「

その執事に案内され、さらに奥へ進んでいくと、そこには白い悪魔達が左右に列を成し、まるで道を作つていてるかのように立っていた。

「お、おいおい、まさか襲つてこねえよな？」

「彼らは玉姫様直属の護衛部隊でござります。」

「自分達はここに来るまで、散々あなた方の仲間を殺してきたのである。相当恨みを買つているのではないだろうか？」

「いえいえ。あの戦いは決して抗うことの出来ない『定め』でござります。なでこちらは恨みになど思つておりません。それにそちらも相当数の犠牲を払われている。・・・『痛み分け』といつやつですな。」

「・・・」

「この玉姫様の間にたどりついたあなた方は、玉姫様の大切な客人となつたのでござります。なでこちらとしては誠意をもつて対応させていただきます。わざ、参りましょ。」

僕らは白い悪魔達が作る道を恐る恐る進んでいった。進んでいくと

そこには、玉座を思わせる巨大な椅子が置かれており、玉姫様らしき人物がちょこんとお座りになっていた。

「玉姫様、連れて参りました。」

「うう苦勞であった。」

僕らは誰に教えられるでもなく、玉姫様の前で膝をつき、平伏した。

「机の上に。机を上に。」

僕らは顔を上げ、玉姫様をしつかりと見た。あの、夢にまで見た念願の玉姫様が今、目の前に座つておられるのだ。

「ついに、ここまで来たのであるな。」

「そうですね。僕らも感動してます。

玉 「わらわが玉姫じや。そち共が、先ほどわらわに向けてテレパ

「そ、そうです。通じましたでしょうか?」

「本当に弱々しくではあつたが、届いたぞ。」

「必死な表情が内にいるからでは、今は隠

はなかつたのだが、思わず開けちゃつたのだ。

話(一)

キ 「まあ結果オーライってやつよ。(じやんせんせき)

玉「わら、わ、わらわら・・・・・、・・・」

「どうなさつたのですか？！」

玉 「実はあたし、『わらわは、～じや』とか『ハコハシヤベリ方、窮屈でほんとは大っ嫌いなの!』」

卷之三

「じいがこひの風にしゃべつた方がいいっていつから、我慢してやつてたけど、もうやせ。せっぱあたし、普通にしゃべるわ。さむべやじてんねん。」

「なんと!」

じですか玉姫様、そうしますと玉姫様としての格式の高さが薄
れてしまわれますよ?」

玉一あたしはお

「うむ。困りましたな。」

キ 「玉姫様の言つとおり。変に格好をつける必要なんてありませんよ。なぜなら、そのままの君が一番素敵だから。」

「うふふ。そうかしら。」

ますか?』

「悪い。つい、血が騒ぐんだ。」

王
とはかくあたしはやりたいなにをやるかでせううれ
しいわ

「…………わかりました。ではそのよひにしだやつていませ

۲۹۱

「それは言えていいのである。」(「それ」を話)
「いる感じだね。」(「それ」を話)
「」(「それ」を話)

玉姫様の「」意向で、もう一度最初の対面するといつからやり直す「」ことになった。

じ 「玉姫様、連れて参りました。」

玉 「よつ、お疲れちやーん」

じ 「・・・・。」

平伏する僕ら。

玉 「そんな平伏なんて堅つ苦しいことしなくていいわよん。無礼講といきましょ。あたしが玉姫、よろしくねん」

じ 「・・・・。」

玉 「あなた達がさつきあたしにテレパツしてくれたんじょ?」

ネ 「通じましたか?」

玉 「ビリル~。」

ネ 「え?」

玉 「かるうじてって感じね。あたしのテレパシー能力が高くなかったら、おそれく届いてなかつたわよ。あたしに感謝なさい。」

ネ 「ど、どうもありがとうございます。」

玉 「でもね、こう、『必死な強き思い』みたいなものは確かに感じ取つたの。だからね、そんな気分じやなかつたんだけどね、こう、扉をパカッと開けてあげちゃつたのよね~。」

ネ 「・・・・とにかく、僕らの思いが玉姫様を突き動かしたというわけですね。」

玉 「ま、そういうことね。・・・・・とまあ、こんな感じでやつていくわよ。いいわね?じい。」

じ 「・・・・どうぞ、『自由に。』

イ 「玉姫様がこんなに気さくな方とは予想していなかつたのである。」

玉 「ふんふんふ~ん」

じ 「随分ご機嫌でらつしゃいますね、玉姫様。」

玉 「そりやそーよ。だつて、異なるルーツより生まれし『セイシ
がここに揃うなんて、こんなドラマチックな展開は初めてだわ。」

じ 「確かにおっしゃる通りでござります。通常は考えられない、
いえ、常識的に考えてありえない事態でござります。」

玉 「そうね。確かに複数の殿方と同時に関係を持つといふのは、
一般的に非常識だと非難される行為ね。・・・・けど、あたしはあ
りだと思うわ。」

じ 「な、何をおっしゃいますか?！」

玉 「だつて、『より優秀なセイシ』と融合を果たすことがあたし
の本能だもの。」

じ 「それは、そうですが・・・・。」

玉 「より優秀なセイシを見つけるためには、より多くの、そして
タイプの異なる様々なセイシ達を競わせること。それしかないわ。」

じ 「それは・・・・一理ありますが・・・・。」

玉 「つまり、常識に囚われない本能的な行動によって、まさにあ
たしが望む理想的な状況が生まれたの。それが、今よ。」

じ 「・・・・全く、そのような斬新的な発想には、私めはついて
いけませんな。」

玉 「さてと、それではそろそろ始めましょ。」

ネ 「始めるつて、僕らはいつたい何をすればいいのでしょうか?」

玉 「あなた達はここにたどり着くまで、幾多の試練を乗り越えて
きたわよね。」

イ 「長く、辛い道のりだったのである。」

玉 「灼熱地獄から始まり、そして我が下僕『ルーケサイト』との
戦い、」

キ 「まさかの敵セイシとの遭遇、そして戦闘、」

ネ 「仲間割れもありました。」

玉 「幾多の試練を乗り越えてきたあなた達にとつて最後の試練よ。」

「最後の試練とは？」

「最後の試練とは、『あたしに選ばれること』に他ならないわ。

「！」

「当然そうなるわな。」

「このあたしを『その気にさせてみなさい』ってことよ。」
「つまりは、『アピール合戦』をしてもらおうと、そういうわけです。」

「ほっほー。そういうことならこの勝負、いただきだなー。」

「何を？！」

「遅らせばながら、自己紹介をさせてもらいます。オレの名前は、キリストと申します。以後お見知りおきを。」

「そ、それなら自分も。自分はイブイブとこう名であります。」

「ぼ、僕はネボスケと言います。」

「ネボスケ？ 変わった名前ね。」

「そいつは寝坊したからそんな名前をつけられたダッサいやつなんすよ。それよりもね玉姫様、なぜオレがキリストを名乗つているかわかりますか？」

「ええ、なんとなくわかるわ。」

「さすが聰明な玉姫様。察しがいい。なぜキリストを名乗つているかと言えば、それはオレがクリスマスの夜に送り込まれたセイジだからに他なりません。」

「そうなるわね。」

「クリスマスと言えば、恋人達にとつて最も大切な一日。そのクリスマスの夜に男と女はロマンチックなマイクラブをし、そしてこのオレが送り込まれた。・・・これだけ言えば、聰明な玉姫様ならご理解いただけますよね？」

「そうね。確かに『クリスマスマイクラブ』はポイント高いわね。」

キ 「もう、決まりっしょ。」

イ 「ちょっと待つのである！確かにイブイブ、つまり23日とクリスマスとの意味合いを比較すれば、クリスマスのほうが重要な意味合いを持つことは、この際認めるところである。」

キ 「だろ、なら、」

イ 「いや、待つのである！しかし、もしイブイブのマイクラブで我らセイシの誰かが玉姫様と早々に融合を果たしてしまっていたのなら、どうなるのであるか？」

キ 「うつー」

イ 「そうしたら、クリスマスもクソもないのである。つまり、一番重要なことはマイクラブの『順番』なのである！－」

キ 「うがつ！－」

イ 「そして、順番で言えば自分、イブイブがこの三回の中では最初なのである！－」

キ 「くそ、痛いとこを突きやがって……。」

イ 「どうであるか？玉姫様。」

玉 姫 「そうね、確かにあなたの言つとおりだわ。」

イ イ 「これは自分で決まりであるな。」

玉 姫 「ねえ、ネボスケ、あなたは何か言つことないの？」

ネ 「え、ぼ、僕はクリスマスイブ、つまり24日に送り込まれたセイシなので、意味合いで言えばクリスマスに当り、そして順番で言えば23日のイブイブに当ります・・・・。」

キ 「相変わらずダッサいな。とりあえずお前せんの可能性は消えたな。あっち行って遊んでる、な？」

ネ 「・・・・。」

キ 「しかしね、順番とは言っても、現実問題として今現在に至るまで、どのセイシも玉姫様と融合を果たせていないわけで、その時点で順番の重要性は消滅なんじゃねえの？」

イ 「たまたま、融合が果たされなかつただけである。女は我らの

セイシが人間になることを望んだからこそ、最初にメイクラブをしたのである。」

キ 「いいや、何かの手違いで事故的に送り込まれたという可能性もあるんじゃねえか？」

イ 「何を言つてあるか？！我らが愛のないメイクラブで送り込まれたセイシであるとでも？！」

キ 「ああそつそ。本命はやはりクリスマスのオレ達で、お前さんらとはお遊びだ。」

イ 「お遊びだと…………？」

キ 「お遊びで戯れていたが、事故的に『送り込まれてしました。』そういうことなんじゃねえの？」

イ 「キリスト、お前、さつきから言わせておけば、」

玉 「待ちなさい。」

イ 「！」

玉 「その点については、もうわかつたわ。今度はもうと他のことでアピールしてもらおうかしら。」

イ 「くつ・・・・・。」

玉 「そうねえ、じゃあ、次は夢でも語りてもうおつかしら。」

イ 「夢・・・・でありますか？」

じ 「つまり、人間になつたらどんなことをしたいかってことですな。」

イ 「自分は世界を飛び回つて、いろいろな世界の観光名所を見て回りたいと考えていてあります。」

玉 「へえ、旅行が好きなのね。」

キ 「ちつちつやい夢だこと。」

イ 「何を？！」

キ 「玉姫様、オレの夢はもっとスケールがでかいですよ。」

玉 「どんな夢かしら？」

キ 「オレの夢は宇宙飛行士になつて、火星に行って、それで火星人と友達になることだぜ。イエイ！」

玉 「うふふ。確かにスケールの大きな夢だこと。でも火星人ってほんとにいるのかしらね。」

キ 「いますとも！飽くなき探求心…」これぞ、男のロマンといつやつですよ、玉姫様。」

玉 「じゃあ次はネボスケの番ね。あなたの夢を聞かせて。」

ネ 「僕の、夢ですか・・・・・。僕の夢は・・・・・、」

イ 「・・・・・。」

キ 「・・・・・。」

ネ 「僕には、まだ夢がありません。」

玉 「そうなの・・・・・？」

キ 「くつははは。まあいいじゃねえすか、玉姫様。」いつの可能

性はもう消えるわけだし。ダサ過ぎて、もはや聞いてらんねえ。」

イ 「ネボスケ、本当に君には夢がないのか？」

ネ 「・・・・・僕には鶴亀といつ苦楽を共にしたセイシがいました。」

キ 「おいおい、何の話だよ？」

玉 「その鶴亀といつセイシがどうしたの？」

ネ 「鶴亀は僕の命の恩人です。彼にはとても具体的な夢があつたのです。」

キ 「おいおい、他セイシの夢の話かよ・・・・・。」

玉 「その鶴亀の夢、聞かせてもらえる？」

ネ 「はい。鶴亀の夢は大女優になることでした。」

キ 「大女優だと？」

イ 「大女優・・・・であるか。」

玉 「うふふ。面白いじゃない？」

ネ 「大女優になるためには、まずカリスマ読者モデルになる必要があります。」

玉 「うんうん、読モね。」

ネ 「そうです。それで女子中高生の憧れの的になります。」

イ 「カリスマとはそういうものであるからな。」

「そうしたら清純派女優として鮮烈デビューーー！」

「清純派なのね！」

「新人賞を総なめ！」

「そんなんうまいこといくかよ。」

「本能のままに歌手活動をしたりもします！」

「それはマルチな才能であるな。」

「7週連続オリコン1位！」

「7週連続て。浜崎あゆみでも無理だろが。」

「その後、きりのいいところで仕事ストップ！」

「え、どうして？」

「結婚するからです！」

「なんと？！相手は誰であるか？」

「クリエイターです！理由は、一番本能のままに生きてそうな

気がするからです！それで、あとは・・・・、」

「・・・・おい、ネボスケ。お前さんの目から変な液体が流れ
出てるぞ。大丈夫かよ？」

「え、あ、いつの間に。これは・・・・これは、涙と言われる
もので、人間の世界で最も尊いとされているものです。」

「涙・・・・？」

「まだ人間でもねえお前さんが、なんでそんなもんを流すんだ
？」

「僕にもわかりません！ただ、ただこんなに具体的な夢を思い
描いていた鶴亀が、何の夢も持っていない僕なんかのために死んで
しまったその無念と、自分の不甲斐なさを思うと涙が止まらないの
です！！」

「た、玉姫様、どうなさいました？！」

「え？」

「わからないの。ネボスケの涙を見ていたら、急に頭が熱く
なってきて・・・・。これが、涙なのね。」

「おいおい、涙つていつたい何なんだよ？」

イ 「自分にも理解不能なのである。」

ネ 「玉姫様……。」

玉 「涙止まらないじゃない。ネボスケ……どうしてくれるのでぐすんっ。」

ネ 「……玉姫様。僕は今、ようやく夢を見つけることが出来ました。」

玉 「え？」

ネ 「僕は……僕は、鶴龜の夢を引き継いで大女優になる…やが僕の夢です!!」

玉 「……それでいいの？」

ネ 「はい！僕の本能が言っているのです。鶴龜の夢を引き継ぎたいと！」

じ 「ちょっとお待ち下さい。ネボスケさんは私めが見たところ、オトコセイシであるとお見受けいたしますが、その場合、女優じゃなくて、男優になるのです？」

ネ 「いえ、僕はあくまで大女優になるのです。」

じ 「いえ、ですから、ネボスケさんはオトコセイシで……、」

ネ 「男に生まれたら、性転換手術をして女になる！」

じ 「！」

ネ 「……それだけのことです。」

じ 「な、なんと、そこまで考えていらしたとは……恐れ入りました。」

「性転換手術をして女になる！」という僕の衝撃発言が飛び出した後、場はしばらく沈黙に包まれた。そしてその沈黙を破つて、玉姫様が言葉を発した。

玉 「あたし、決めたわ。」

「左様で『jゼ』こますか。それで、どのセイシになれるのですか？」

「もちろん、Jの自分でありますよ。」

「……うーん、世界中を旅行するのも悪くないと思つたわ。」

「そうでありますよ！」

「でもね、よく考えたらあたし、根つからの『出不精』なのよ

「うがつ！」

「だから、めんなさい。」

「くつははは。残念だつたな、イブイブ。……といつ」と
は、つまり、このオレで決まりつことですね！」

「うふふ。」

「ひやつほーい！」

「あなた、あたしの話、聞いてなかつたの？」

「は？」

「あたしは根つからの出不精だと言つたでしょ。」

「え、ええ、それは聞きましたが……。」

「つまり、宇宙なんて、もつてのほかよ。」

「……（がびーん）」

「玉姫様、ということは……。」

「ええ、あたしはネボスケに決めたわ。」

「え、ぼ・・・・・僕？」

「オウマイガ。こんなダサイセイシのJがいいんすか？！」

「ネボスケの話を聞いて、あたしも大女優になつてみたくなつたの。それだけのことよ。」

「ですがね、大女優になるという夢は元々ネボスケの夢ではない！鶴亀つてやつの夢だったんでしょ？！」

「…。」

「他セイシの夢をさも自分の夢であるかのよう」語り、そして

玉姫様の気を惹くなど、セイシの道から外れた外道な行為だ！

玉 「それは違うわ。」

キ 「え？」

玉 「友の果たせなかつた夢を叶えてあげたいといつここの気持ち。これは自己を犠牲にしてでも他者を思いやるという尊い感情よ。」

キ 「うう・・・！しかし、それは本能のままに生きるオレらセイシにとつてあるまじき思考！」

玉 「確かにそうね。通常のセイシの発想ではあり得ない。・・・でもあたしはネボスケのそんなところに惹かれたの。」

キ 「そ、そんなあ。そ、そいつは出来損ないのセイシなんすよ？」

！」

じ 「キリストさん、玉姫様は一度決められたことを変えるようなお方ではございません。」

玉 「そうよ。あたしに一言はないわ。大人しく下がりなさいな。」

キ 「納得できねえよ。」

玉 「まあネボスケ、こちらにいらっしゃい。」

ネ 「はい。」

キ 「うわ～ん、玉姫様～。」

イ 「キリスト、往生際が悪いぞ。『セイシたる者、潔くあれ』であらう？」

キ 「ぢぢきしよ～。お前さんは悔しくないのかよ？！」

イ 「もちろん悔しかつたのである。・・・・が、今は祝福したい気持ちである。」

キ 「あ？祝福だあ？！・・・・お前さんも十分変わりもんのセイシだぜ。まつたく。」

イ 「我々には何かがネボスケにはあつたのであるう。そして玉姫様はそれを感じ取つたのであるうな。」

ネ 「あ！」

玉 「どうしたの？」

ネ 「あるセイシから託されたこの指輪を玉姫様に渡すのを、すっかり忘れていました。」

玉 「あら、綺麗な指輪ね。」

ネ 「今更ですが、受け取つて頂けますか？」

玉 「うふふ。あなた、馬鹿ね。さつとこの指輪を渡していれば、簡単にあたしのハートを射止められていたのに。」

ネ 「そうですよね。僕は本当に馬鹿です。」

玉 「…………なーんてね、嘘よ。」

ネ 「え？」

玉 「こんな指輪で射止められる程、あたしのハートは単純じゃないわ。」

ネ 「え、え？」

玉 「むしろ、逆ね。こんな指輪であたしの気を惹きつなんとしてたら、今頃あなたを選んでいなかつたわ。」

ネ 「それは、あぶないところでした。」

玉 「うふふ。うつかり者な自分の性格に救われたわね。」

ネ 「じゃあ、この指輪は……」

玉 「そうねえ、でもせつからくだからありがたく頂戴しておくわ。」

ネ 「玉姫様、意外とちやつかりされているんですね。」

玉 「まあ！うつかり者のあなたに言われたくないわ。うふふ。」

じ 「それでは、これから『融合の儀式』を始めさせていただきま

す。 じ 「…………と、その前に、もう一度お一方の『覚悟の程』を確

認させていただきます。」

玉 「いいわ。」

玉 「…………。」

玉 「…………す。」

玉 「…………。」

じ「ネボスケさんはここに至るまで、数々の試練を乗り越えて参りましたが、これは決してゴールではございません。新たな試練へのスタートなのでござります。」

ネ「はい。」

じ「玉姫様と融合を果たしたからと言つて、必ず無事に人間になりますとは限りません。『死産』という形で生涯を閉じることもござります。」

玉「そうね。」

じ「また、無事人間として産まれることができたとしても、親によつては育児放棄をされるかもしませんし、また、虐待を受けるやもしれません。」

玉「負けないわ。」

じ「保育園は待機児童で溢れ、なかなか入園できないかもしませんし、小学校に上がれば上履きを隠されていじめられたり、中学校に上がれば好きな子に告白した時、フラれてショックを受けることもありますやもしれません。」

ネ「上履きを？」

じ「社会人になつても、不景氣で正社員になれないかもしませんし、また・・・」

玉「じい。もういいわ。」

じ「・・・左様でござりますか。」

玉「それにあたし達は大女優になるんですもん。」

じ「そうでございましたね。その点についても言つておかなければなりませんな。男ながらに大女優を目指すということは、世間から好奇の目で見られ続けるイバラの人生を送るということござります。その覚悟はおありですかな？」

玉「承知の上よー！」

ネ「僕は・・・本能のままに生きるだけです！！」

じ「左様でござりますか。・・・承知致しました。それでは、融合の儀式を始めるとしましょう。」

僕と玉姫様は、『受精膜』と呼ばれる、誰にも破ることの出来ない透明な膜にすっぽりと覆われた。もはや、僕と玉姫様の融合を邪魔できる者は誰もいなくなつた。玉姫様の間には、護衛部隊の「玉姫様、万歳——！」という声が響き渡つていた。

玉姫
「ねえ、ネボスケ。」
「うん？」
「ふふ～ん 新人賞、総なめにしよーね。」
「うん、総なめにしよー！」
「7週連続オリコン1位も獲るんだよ？」
「もちろん！ そしたら、クリエイターと結婚さ。」
玉姫
「ふふふ～ん ・・・じゃあ、おいで。あたしの中へ。」

BGM・マライア・キャリー「恋人たちのクリスマス」

こうして、オカマの男性が生まれてくる

世界中すべてのオカマ達に
メリークリスマス

Fin.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5186p/>

ドラマチック受精

2010年12月25日20時27分発行